

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 21 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590132

研究課題名(和文)ノンゼロ関係が罪悪感・和解行動に及ぼす影響

研究課題名(英文)Effects of "nonzero" on guilt and conciliatory behaviors

研究代表者

大坪 庸介(Ohtsubo, Yohsuke)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：80322775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：対人場面における相手との関係と感情の関係について広く検討した。当初は他者に意図せず被害を与えた場面での相手の関係価値と罪悪感、和解行動について検討することを計画していた。ところが、必ずしも関係価値が罪悪感を上昇させないことが明らかになったため、関係価値をどのように操作すればよいかを検討した。その結果、相手のコミットメント・シグナルや社会的注意が親密さの感覚を上昇させることが明らかになった。今後の研究では、コミットメント・シグナルや社会的注意を操作することで関係価値の実験操作が可能になると考えている。

研究成果の概要(英文)：This research investigated associations between interpersonal relationships and emotions. Initially, this project envisioned to scrutinize the effect of relationship value in the transgression context on the offenders' guilt and conciliatory behaviors. However, the present project revealed that relationship value does not necessarily elevate offender guilt. Therefore, we decided to examine how relationship value can be experimentally manipulated. This line of investigation revealed that commitment signals and social attention effectively increase a sense of intimacy. In future studies, relationship value can be manipulated by altering the quantity of commitment signals and social attention.

研究分野：社会心理学

キーワード：ノンゼロ関係 関係価値 罪悪感 謝罪 親密さ シグナル

1. 研究開始当初の背景

近年、関係価値が対人的関係に及ぼす影響への関心が高まっている。例えば、霊長類学では、和解行動は価値のあるパートナー関係を維持するために進化したものであるとする「価値ある関係仮説」が提唱され、多くの霊長類にこの仮説が当てはまることが示されている。ヒトも例外ではない。社会心理学における赦し研究の第一人者である McCullough らの研究チームは、関係価値が赦しを予測することを示した。これは、被害者にとって加害者の関係価値が和解を促す要因であることを意味している。一方、研究代表者の大坪は、加害者にとっても被害者との関係価値が謝罪を促す要因になることを示した。本研究では、対人場面での関係価値についての理解を深めることを目指した。

2. 研究の目的

(1) 本研究では関係価値を実験的に操作することで罪悪感が増加する(関係価値を上昇させた相手に迷惑をかけた場合により強い罪悪感が経験される)という仮説を検討することを目的とした。

(2) 上記の目的(1)の検討は初年度から継続して挑戦したが、仮説を支持する結果が得られなかった。そこで、どのような要因により関係価値が増加するのかをよりよく理解したいと考えた。代表者の以前の研究から、友人からの社会的注意(相手が自分の福利厚生に関心をもってくれること)及びコミットメント・シグナルが関係価値を増加させるのではないかと考え、このことを検討することとした。

(3) 上記の目的(1)についての研究の失敗を踏まえ、関係価値を一方向的に操作することが問題ではないかと考えた。具体的には、関係価値とは双方向的なものであり、関係価値の高いパートナーとの対人葛藤は、そうではない相手との葛藤と比べて、自分自身の対応だけでなく相手の対応も違うのではないかと考えた。つまり、関係価値と和解の関係は自分自身の葛藤への対応と相手の葛藤への対応の交互作用効果によって説明されるかもしれない。このことを検討するために、相手が葛藤場面でどのような感情を抱いているかによって罪悪感の強さが変化する可能性を検討した。

3. 研究の方法

(1) 関係価値を増加させると相手に迷惑をかけたときの罪悪感が増加するという仮説を検討するために、お互いに相手に対して資源分配を行う状況を設定した。具体的には参加者が架空のパートナーに資源を分配した後、パートナーの判断で参加者自身の報酬の一部が決定される状況を設定した(依存あり条件)。それに対して、パートナーの判断に

よって報酬が変化しない条件を統制条件とした。参加者には、くじのような完全にはコントロールできないやり方で分配の決定をしてもらい、自分がより多くの資源を受け取る不公正な分配をするようにした。その後、参加者の罪悪感を自己報告、皮膚電気反応などで測定した。

(2) パートナーからの社会的注意、コミットメント・シグナルが関係価値を増加させることを調べるために4つの研究を行った。①参加者には自己紹介文章を書いてもらい、それを初対面のパートナーに短時間見せた。そして、パートナーが参加者の自己紹介についてよく記憶しているほど(注意を払ったことがわかるほど)親密さなどの相手への価値づけが増加することを検討した。②架空のコンピュータ・ゲームによってパートナーがモニターを通じて参加者に注意を払う・払わない・統制条件を設定し、ゲーム後に資源の分配を行ってもらった。③実際の友人同士を実験室に呼び、お互いに相手に最近起きた良い・悪い出来事をどれくらい知っているかを尋ねた。さらに、相手に対する親密さなどを尋ねた。④架空のシナリオによって、友人が誕生日にお祝いをしてくれるなど関係にコミットしていなければいけないようなことをした(しない)と想像してもらった。また、コミットメントのシグナルには誕生日プレゼントを渡すといったコストのかかるものと、単にお祝いを述べるだけのコストのかからないものがあると考え、これも条件とした。

(3) インターネット調査により他者と現実にもめた場面を回想してもらった。そして、そのときに相手がどのような感情を経験していたか、回答者自身が罪悪感をどの程度強く経験したか、相手に謝罪をしたかを尋ねた。

4. 研究成果

(1) 意図せずに不公正な分配を行った後に、罪悪感を含む感情をどの程度強く経験しているかを5件法で回答してもらった(1=まったくそう感じない~5=とても強くそう感じる)。しかし、実験パートナーに依存している関係価値高条件でも相手に依存しない関係価値低条件でも罪悪感の程度に差は見られなかった。具体的には、関係価値高条件での罪悪感の平均値は2.12点、関係価値低条件での罪悪感の平均値は2.05点であった。この2つの平均値の間には統計的に有意な差はなかった。

(2) 関係価値を社会的注意、相手からのコミットメント・シグナルが増加させることを検討する4つの研究を実施した。

① 初対面のパートナーが自分の自己紹介文章を読み、その内容をよく記憶していたという状況であり、実際の対人関係は存在しない。また、相手が自分の文章をよく覚えていたか

らといって、それが実質的な利益になることはない状況であった。それにも関わらず、相手がよく記憶していた高・注意条件では、相手が自分の作文の内容をよく覚えていなかった低・注意条件と比較して親密さ(図1左)、相手と友人になりたいという気持ち(図1中央)、相手に対する印象(図1右)がおしなべて高くなっていた。

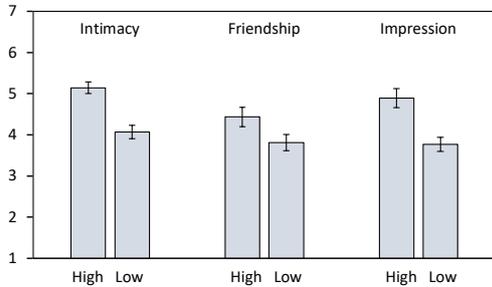


図1 研究(2)①において、パートナーからの注意量の高低(High vs. Low)ごとの相手に対する親密さ、友人になってもよいと思う程度、印象の平均値

② この研究では架空のコンピュータ・ゲームでモニターを通じてパートナーが参加者に注意を払う程度を操作した。その後、パートナーに一定の資源を渡し、そのうち好きな額を相手に分配するように伝えた。その結果、特に相手が注意を払うことができなかった統制条件と比較して注意があった条件で分配額が大きくなることはなかった。その一方、相手が注意を払ってくれなかった条件では相手が注意を払ってくれた条件と比較して、相手への分配額が小さくなった。図2の左は注意あり条件での分配額の分布(縦軸は実際の金額ではなく標準化した値にしている)、中央は統制条件の分配額の分布、右側は注意なし条件での分配額の分布である。注意なし条件のみ分布が下の方(少額の分配額)まで長くのびていることがわかる。

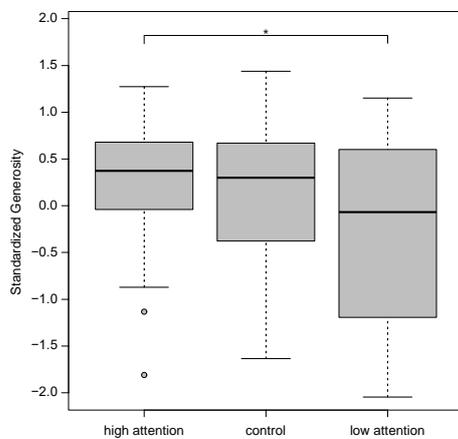


図2 研究(2)②において注意あり、統制、注意なし条件におけるパートナーへの資源分配額の分布

③ この調査では各参加者は友人が自分に起きた良いできごと、悪いできごとをどれくらい正確に把握しているかは知らされなかった(これについては実験者が事後に回答に基づき算出した)。それにもかかわらず、各参加者は自分についてよりよく知ってくれている友人(社会的注意を向けてくれている相手)に対してより高い親密さを覚えており、自分あまり注意を払っていない相手への親密さは低くなっていた。友人同士でどれくらいお互いに注意を払っているかは強く関連していた。しかし、参加者自身が相手にどれくらいよく注意を向けているかの効果を統計的に統制しても、相手が参加者に向けている注意が参加者が相手に対してもっている親密さを規定していた。

④ ここでは、友人が誕生日にプレゼントをくれる(コストのかかるコミットメント・シグナル)、誕生日のお祝いを述べる(コストのかからないシグナル)、誕生日に何も声をかけない(シグナルなし)といった架空のシナリオを提示し、参加者の相手への感情の変化を調べた。以下の図3において赤、黄、青の順でデータが下の方に下がっていることがわかる。これはコストあり(赤)、コストなし(黄)、シグナルなし(青)の順に関係がよくなる(青の場合は悪くなる)と判断されたことを示している。

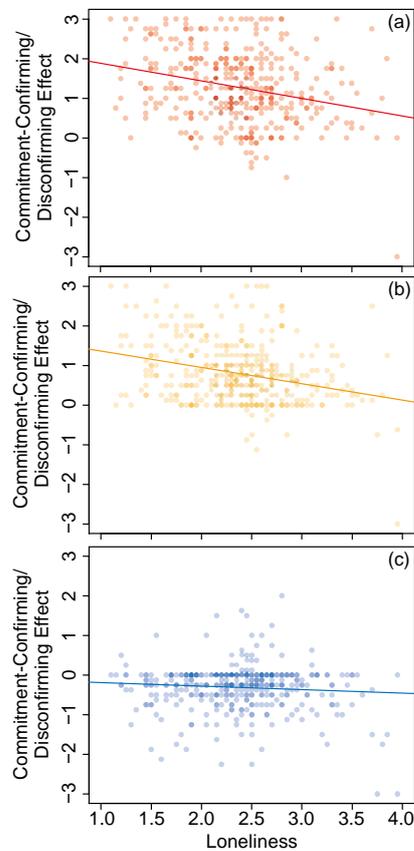


図3 架空のシグナルによって関係が良くなる・悪くなる程度

それに加えて、図3の横軸は回答者の孤独感の強さを表している。図3aと図3bは右下がりのパターンを示している。つまり、孤独感の強い者は友人のコミットメント・シグナルへの感受性が低いことがわかった。

(3) インターネット調査により他者と葛藤があった場面で、相手の感情、相手への罪悪感、相手への謝罪を尋ねた。その結果、相手ともめたときに相手が経験していると予測された感情は大きく悲しみと怒りであった。相手が悲しんでいるという知覚及び相手が怒っているという知覚はいずれも罪悪感を上昇させた。しかし、興味深いことに相手が悲しんでいるという知覚は謝罪を上昇させたが、相手が怒っているという知覚は謝罪を抑制していた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① Ohtsubo, Y., & Yamaguchi, C. (2017). People are more generous to a partner who pays attention to them. *Evolutionary Psychology*, 15(1). doi: 10.1177/1474704916687310 (査読あり)
- ② Sznycer, D., Al-Shawaf, L., Bereby-Meyer, Y., Curry, O. S., De Smet, D., Ermer, E., Kim, S., Kim, S., Li, N. P., Lopez Seal, M. F., McClung, J., O, J., Ohtsubo, Y., Quillien, T., Schaub, M., Sell, A., van Leeuwen, F., Cosmides, L., & Tooby, J. (2017). Cross-cultural regularities in the cognitive architecture of pride. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 114(8), 1874-1879. doi: 10.1073/pnas.1614389114 (査読あり)
- ③ Yamaguchi, M., Smith, A., & Ohtsubo, Y. (2017). Loneliness predicts insensitivity to partner commitment. *Personality and Individual Differences*, 105, 200-207. doi: 10.1016/j.paid.2016.09.047 (査読あり)
- ④ Tanaka, H., Ohtsuki, H., & Ohtsubo, Y. (2016). The price of being seen to be just: An intention signalling strategy for indirect reciprocity. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 20160694. doi: 10.1098/rspb.2016.0694 (査読あり)
- ⑤ Ohtsubo, Y., & Tamada, S. (2016). Social attention promotes partner intimacy. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 7(1), 21-24. doi: 10.5178/lebs.2016.45 (査読あり)
- ⑥ Ohtsubo, Y., Yamaura, K., & Yagi, A. (2015). Development of Japanese measures of reconciliatory tendencies: The Japanese Trait Forgiveness Scale and the Japanese Proclivity to Apologize Measure. *社会心理学研究*, 31(2), 135-142. doi: 10.14966/jssp.31.2_135 (査読あり)

[学会発表] (計9件)

- ① 八木彩乃 (2017年6月23日~25日). 怒らせた? 悲しませた? 被害者の感情についての知覚が加害者の感情や行動におよぼす影響 日本感情心理学会 同志社大学 (京都府).
- ② 大坪庸介 (2016年12月10日~11日). 支配傾向の高い人は謝らないのか? 日本人間行動進化学会第9回大会, 金沢市文化ホール (石川県).
- ③ 八木彩乃 (2016年6月18日~19日). 価値ある相手を赦すのは理性的な判断か? : 回想法による検討 日本感情心理学会第24回大会, 筑波大学 (茨城県).
- ④ Smith, A. (2015年12月5日~6日). Commitment signals in the context of friendship and romantic relationships. 日本人間行動進化学会第8回大会, 総合研究大学院大学 (神奈川県).
- ⑤ 山口千晶 (2015年10月31日~11月1日). 注意を向けてくれない相手には親切にしない? 日本社会心理学会第56回大会, 東京女子大学 (東京都).
- ⑥ 松ヶ崎溪介 (2015年10月31日~11月1日). 関係価値が罪悪感に及ぼす影響: 皮膚コンダクタンス反応を用いた検討 日本社会心理学会第56回大会, 東京女子大学 (東京都).
- ⑦ 八木彩乃 (2015年6月13日~14日). 罪悪感は本当に謝罪を促進するのか? 日本感情心理学会第23回大会, 新渡戸文化短期大学 (東京都).
- ⑧ 八木彩乃 (2014年, 11月29日~30日). 相手への共感と罪悪感の経験に影響を与えるのか? 日本人間行動進化学会第7回大会, 神戸大学 (兵庫県).
- ⑨ 大坪庸介 (2014年, 7月26日~27日). 関係価値は共感を介して赦しを促進するのか? 日本社会心理学会第55回大会, 北海道大学 (北海道).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大坪 庸介 (OHTSUBO, Yohsuke)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号: 80322775